

道場神守護事

建治二年一二月一三日 五五歳

鷲目五貫文慥かに送り給ひ候ひ了んぬ。且つ知ろし食すが如く、此の所は里中を離れたる深山なり。衣食乏少の間読経の声続き難く、談義の勤め廢るべし。此の託宣は十羅刹の御計らひにて檀那の功を致さしむるか。止観第八に云はく「帝釈堂の小鬼、敬ひ避くるが如し。道場の神大なれば妄りに侵嬈すること無し。又城主剛ければ守る者強し。城主慥ければ守る者忙る。心は是身の主なり。同名同生天は是能く人を守護す。心固ければ則ち強し。身の神尚爾なり。況んや道場の神をや」と。弘決第八に云はく「常に人を護ると雖も、必ず心固きに依りて神の守り則ち強し」と。又云はく「身の両肩の神尚常に人を護る。況んや道場の神をや」云云。人所生の時より二神守護す。所謂同生天・同名天、是を俱生神と云ふ。華嚴経の文なり。文句の四に云はく「賊南無仏と稱して尚天頭を得たり。況んや賢者稱せば十方の尊神敢へて当たらずらんや。但精進せよ懈怠すること勿れ」等云云。釈の意は月氏に天を崇めて仏を用ひざる国あり。而るに寺を造り第六天の魔王を主とし、頭には金を以てす。大賊年来之を盗まんとして得ず。有る時仏前に詣で物を盗んで法を聴く。仏説いて云はく、南無とは驚覺の義なり。盗人之を聞いて南無仏と稱して天頭を得たり。之を糺明せし処盗人上の如く之を申す。一国皆天を捨て、仏に帰せり云云。彼を以て之を推するに設ひ科有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか。而るに今示し給へる託宣の状は兼ねて之を知る。之を案ずるに難却って福来たる先兆なるのみ。妙法蓮華経の妙の一字は竜樹菩薩の大論に釈して云はく「能く毒を変じて薬と為す」云云。天台大師云はく「今経に記を得る即ち是毒を変じて薬と為すなり」云云。災ひ来たるも変じて幸ひと為らん。何に況んや十羅刹之を兼ねるをや。薪の火を熾んにし風の求羅を益すとは是なり。言は紙上に尽くし難し、心を以て之を量れ。恐々謹言。

十二月十三日

日 蓮 花 押

御 返 事